

第61期定時株主総会の招集に際しての 電子提供措置事項

第61期（2024年4月1日～2025年3月31日）

- (1) 事業報告の「業務の適正を確保するための体制」
- (2) 連結計算書類の「連結株主資本等変動計算書」
- (3) 連結計算書類の「連結注記表」
- (4) 計算書類の「株主資本等変動計算書」
- (5) 計算書類の「個別注記表」

JBCCホールディングス株式会社

上記事項につきましては、法令及び当社定款第15条の規定に基づき、書面交付請求をいただいた株主様に対して交付する書面（電子提供措置事項記載書面）への記載を省略しております。

業務の適正を確保するための体制

(1) 業務の適正を確保するための体制の決議の内容の概要

当社は、会社法及び会社法施行規則に定める業務の適正を確保するための体制について、取締役会において決議しております。その概要は以下のとおりであります。

①取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- ・当社は、コンプライアンスに関する基本原則を定める「J B C Cグループ行動基準」を制定し、当社及び当社子会社を含むJ B C Cグループ各社の役員及び使用人全員が社会倫理及び法令に則り業務を遂行するための行動の規範としている。当社の役員は、J B C Cグループ全体におけるコンプライアンスの遵守及びその徹底を率先垂範するとともにその実践的運用を行う体制を構築し、使用人に対するコンプライアンス教育を実施する。
- ・J B C Cグループ全体のコンプライアンス体制の整備及び問題点の把握は、リスク管理委員会が管掌し、法務・コンプライアンス担当を含むコーポレートスタッフ（当社においてJ B C Cグループ全体にわたるスタッフ業務を司る部門）が適宜協議を行いながら、これを実施する。
- ・J B C Cグループにおいて法令、社内規則や社会倫理に反すると疑われる行為があった場合、これを直接通報できる体制を確保する。このためにJ B C Cグループ各社において共通の「J B C Cグループ内部通報規程」を定め、社外弁護士を通報窓口とする「コンプライアンスヘルプライン」を設置する。社外に向けても、メールにて外部通報を受けることをホームページで公開している。通報者においては本人の希望により匿名性が約束され安全と利益が保障される。法務・コンプライアンス担当は、通報窓口からの指摘があった場合、必要に応じ通報事実について調査を指揮・監督し適切な対策を策定する。また、代表取締役社長と協議のうえ、必要であると認められた場合、対策を実施し、さらにJ B C Cグループ内において事実を開示し対処及び結果について周知徹底する。
- ・代表取締役社長は、業務監査を行う内部監査担当を管掌し、内部監査担当は、常勤の監査等委員である取締役と意見を交換しつつ、J B C Cグループ全体にわたる業務執行状況の監査を行う。

②取締役の職務の執行に係わる情報の保存及び管理に関する体制

- ・株主総会、取締役会、経営会議（経営全般について代表取締役からの諮問を受ける会議体）その他の重要な意思決定に係わる情報は、法令、定款及び社内規程に則り記録・保

存・管理され、株主を含む権限者及び必要な関係者が閲覧できる体制を維持する。

- ・情報セキュリティ委員会は、個人情報保護を含む、情報の安全管理に関するガイドラインを定め周知徹底する。

③当社及び当社子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ・事業の継続・発展を実現するための投資・戦略的提携などに関する事項については、コーポレートスタッフの各責任者が、所管部門に関する必要ナリスク評価を行ったうえで提示する資料に基づき、取締役会もしくは経営会議において最終的に評価・決裁する。
- ・日常業務における債権管理等については、「債権保全管理規程」、「JBCCグループ連結決算規程」及び各種の取引先選定に係わる基準等、事業遂行上のリスクを管理する規程に従い処理される。
- ・有事の対応については、職務分掌に基づく役割分担に応じコーポレートスタッフの各責任者が連携してこれにあたり、代表取締役社長がこれを統括する。経営会議及びリスク管理委員会は、平時において有事対応体制の整備を行う。
- ・リスク管理委員会は、グループの対外リスクやコンプライアンスリスクに関する施策の検討、推進を行う。BCP委員会は事業継続に関する施策について、情報セキュリティ委員会はグループのセキュリティに関する施策について、それぞれ検討、推進を行う。
- ・当社及びJBCCグループ各社間で経営指導契約を締結するとともに、共通の「事業会社管理規程」を制定し、当社からJBCCグループ各社に対する指導ないし管理等の指針を明確にする。

④当社及び当社子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- ・取締役会は、取締役の中から代表取締役社長を選定し、代表取締役社長に取締役会が定める経営機構におけるコーポレートスタッフ等を任命させる。コーポレートスタッフは、職務分掌に基づき当社の業務を執行するとともに、経営指導契約に基づきJBCCグループ各社の経営を支援する。
- ・取締役会の意思決定の妥当性を高めるため、法律が定める独立性要件を満たす社外取締役を任命する。JBCCグループ各社に対しては原則として当社の経営幹部より適切な人材を派遣し、効率的な職務の執行を支援する。
- ・取締役会が十分に機能するよう、その運営実務を遂行するための事務局を設置する。
- ・代表取締役社長は、JBCCグループの事業を代表する経営幹部で構成される経営会議を統括し、その効率的運営と監視・監督体制の整備を行う。
- ・各取締役の職務分掌と権限については、社外取締役を含めて適切な役割分担と連携が確保される体制を、年度初めにおける組織編成時に設定する。
- ・中期経営計画及び年度予算を策定し、グループ全体としての目標達成に向けて各分掌、各社・各部門において具体的な戦略を立案・実行できる体制を構築する。
- ・IT企業の優位性を活かし、積極的なITの有効活用を通じて業務の効率化を図る。
- ・当社及びJBCCグループ各社間で経営指導契約を締結するとともに、共通の「事業会社管理規程」を制定し、当社からJBCCグループ各社に対する指導ないし管理等の指

針を明確にする。

⑤当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

- ・ J B C Cグループ各社にコンプライアンス推進担当者を置くとともに、当社において J B C Cグループ各社の業務執行に関する内部監査を行う専任組織を設置する。その際、「J B C Cグループ行動基準」は、J B C Cグループに所属する役員及び使用人全員が業務を遂行するうえでの行動の規範であり、J B C Cグループ各社における適切な内部統制システム整備の指針となる。
- ・ J B C Cグループの事業を代表する経営幹部で構成される経営会議を定期的に開催し、当社代表取締役社長による議事運営の下、グループ経営執行の重要課題の審議決定を行う。J B C Cグループ各社において重要な事象が発生した場合には、当該会議における報告が義務付けられる。
- ・ グループ事業管理会議を定期的に開催し、スタッフ責任者間でグループ全体としての実務的な懸案事項の解決方法を周知し、J B C Cグループ各社における実行を支援する。
- ・ 内部通報制度（外部通報制度を含む）をJ B C Cグループ全体として運用する。
- ・ コーポレートスタッフの財務部門責任者は、J B C Cグループの統一会計基準を策定し、連結決算対象各社間において共通の「J B C Cグループ連結決算規程」を制定させ、主要な計数的問題状況を常時モニタリングする。
- ・ J B C Cグループ間における会社間取引は、法令・会計原則・税法その他の社会規範に照らし適切なものであることを求められる。
- ・ 当社からJ B C Cグループ各社へ監査役を派遣することにより、内部監査部門と連携した内部統制体制に関する監査を実施する。また各社監査役と当社の常勤監査等委員である取締役で構成されたグループ監査役会を設置し、定期的に所属企業の状況に関する報告を実施する他、連携してJ B C Cグループとしての監査の実効性の向上を図る。
- ・ 当社及びJ B C Cグループ各社間で経営指導契約を締結するとともに、共通の「事業会社管理規程」を制定し、当社からJ B C Cグループ各社に対する指導ないし管理等の指針を明確にする。

⑥監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを「求めた場合」における当該使用人に関する事項

- ・ 監査等委員会の求めがあったときは、監査等委員会の職務を補助する使用人（監査等委員会スタッフ）として、特に適切な人材を配置する。

⑦前項の使用人の取締役からの独立性に関する事項及びその使用人に対する指示の実効性に関する事項

- ・ 監査等委員会スタッフについては、その独立性を確保するため、業務の執行に当たる役職には従事させず、任命、異動等人事権に係わる事項の決定には常勤監査等委員の事前の同意を得る。
- ・ 監査等委員会スタッフの人事考課については、その適切な職務遂行のため、常勤監査等委員が行い、人事異動は常勤監査等委員である取締役と取締役が協議のうえ実施する。

⑧当社の取締役及び使用人並びに子会社の取締役、監査役、使用人が監査等委員に報告をするための体制、その他の監査等委員会への報告に関する体制

- ・ 常勤監査等委員は、取締役会の他、経営会議等の重要な意思決定が行われる会議へ出席するとともに、稟議書その他業務執行に関する重要な文書を閲覧し、必要に応じてJ B C Cグループ各社の取締役及び使用人から説明を求めることができる。
- ・ 代表取締役社長及び業務を担当する取締役は、取締役会において定期的にあるいは随時、その担当する業務の執行状況の報告を行う。
- ・ 取締役は、重大なコンプライアンス違反、信用毀損他、会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事実があること等を発見したときは、直ちに監査等委員会に報告する。
- ・ 当社及びJ B C Cグループ各社の取締役並びに使用人は、監査等委員会が持株会社としての当社事業の報告を求めた場合、又は監査等委員会がJ B C Cグループの業務及び財産の状況を調査する必要がある求めた場合は、迅速かつ的確に対応する。
- ・ 当社及びJ B C Cグループ各社の全ての取締役及び使用人は、J B C Cグループ行動基準に基づき、J B C Cグループが関わる違法、不正又は不適切な事象について、これを知ったときは全て上司に報告し、適切な指示を仰ぎ処置を行うべき責務を担う。また行動基準は、上司による隠匿や放置の可能性が認められる場合、これを見逃すことは法的な責任につながる可能性があることを明示し、内部通報制度に基づく直接の通報を奨励する。当社は、これに応じ内部通報制度窓口（コンプライアンスヘルプライン）を設け、法令に基づく取締役からの報告に関わる事項の他、全ての使用人及びJ B C Cグループ各社の取締役、監査役、使用人並びに関係者からのJ B C Cグループが関わる違法、不正又は不適切な事象に関する通報を受け、これに対処する。
- ・ 内部通報規程は、通報者が通報を行ったことにより不利益を被ってはならないことを明示し、制度的保護を保障する。

⑨その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- ・会計監査人である監査法人から監査等委員会への監査計画及び監査結果に関する説明会を設ける。
- ・監査等委員会と会計監査人及び内部監査部門との情報及び意見交換の機会を設ける。
- ・グループ監査役会においては、担当する各社の状況報告のみならず、積極的に意見交換及び提言を行い、常勤監査等委員と連携して問題解決に当たる。
- ・監査等委員会が監査（調査を含む）のために要する費用については当社がこれを負担するものとし、予め年間の監査計画に基づき経費予算を計上する。

(2) 業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要

当社は、2016年6月16日付で監査等委員会設置会社へ移行いたしました。この移行により、取締役会においては執行機能と監督機能の分離を明確化しコーポレートガバナンスの実効性を高めるとともに、意思決定のさらなる迅速化を図っております。

当期に実施しました主な取り組みについては以下のとおりです。

【リスク管理に関する取り組み】

- ・当期はリスク管理委員会において、重点的に管理するリスクをコンプライアンスリスク（内部通報・内部監査）、災害リスク（BCP）、情報漏洩リスク（情報セキュリティ）、内部統制の不備リスク（J-SOXを含む内部統制システム）の4つとし検討・推進してまいりました。なお、その他リスクについては、各コーポレートスタッフにて適切に把握・対策を行い、その対応状況やリスクの重大化懸念のある事項については、リスク管理委員会で報告し必要に応じ審議・対応を行うこととしています。またリスク管理委員会で審議した結果については、取締役会に報告し問題意識を共有いたしました。

【コンプライアンスに関する取り組み】

- ・コンプライアンスに関する基本原則を定める「J B C Cグループ行動基準」に基づき、全グループにおいてコンプライアンスの教育を実施いたしました。教育内容は、「J B C Cグループ行動基準」の全体の理解、個人情報及び特定個人情報の取扱い、情報漏洩等のセキュリティ対策、ソーシャルメディア利用に関する指針、内部統制に関する考え方等をテーマとし、実施後には理解度テストも行い定着化に努めております。
- ・J B C Cグループ内で生じた、社会倫理に反する行為や、法令・規程違反等のコンプライアンス問題について、「J B C Cグループ内部通報規程」に基づき、相談・通報の窓口として、法務・コンプライアンス部門所管の下「コンプライアンスヘルプライン」を設置しております。J B C Cグループ社員に対しては、安全に通報者の匿名性を確保していることを周知し有効に活用することを推進した結果、相談・通報も数件寄せられて、いずれも早期の問題発見と対処、解決の効果が着実に上がっております。

【情報セキュリティ・BCPに関する取り組み】

- ・情報セキュリティについては、情報セキュリティ委員会において、グループのセキュリティ監視・運用体制の見直し、Pマーク要求事項の改訂による規程や運用の更新、またネットワーク等の脆弱性診断による対策措置を実施し、セキュリティレベル向上の取り組みを行いました。
- ・BCPについては、BCP委員会において、大規模災害対策、事業継続計画の見直しと策定、災害発生を想定した訓練を実施いたしました。
- ・委員会として全体の進捗、課題等については取締役会及び経営会議へ報告いたしました。

【子会社管理に関する取り組み】

- ・ J B C Cグループの事業を代表する経営幹部で構成される経営会議を定期的に開催し、各社の予算進捗状況の確認や J B C Cグループ経営に係わる情報共有を行っております。また J B C Cグループ各社から当社に対し事前に承認・報告すべき事項を定めた事業会社管理規程に基づき、必要に応じて、 J B C Cグループ会社から審議課題の付議・報告がなされました。

【内部監査及び監査等委員会監査に関する取り組み】

- ・ 内部監査部門は、全社的な内部統制の内容を適切に理解及び分析したうえで、業務プロセスにおける内部統制の評価対象を選定し、その整備・運用状況等や評価結果について意見交換を行い、監査の実効性を図りました。
- ・ 常勤監査等委員は、取締役会、経営会議等主要な会議に出席し取締役及び使用人等からその職務の執行状況の報告等を受け、必要に応じて説明を求め、重要な決裁書類を閲覧するとともに、 J B C Cグループ会社の主要な事業所への往査を実施いたしました。また J B C Cグループ各社の監査役で構成されたグループ監査役会を開催し、リスクや懸念事項の情報共有も行いました。
- ・ 監査等委員会は、常勤監査等委員より上記の報告を受けるとともに、取締役会においては、取締役から職務の執行状況の報告等を受け、必要に応じて説明を求め、取締役の業務執行が適切に行われているか確認をしております。また四半期に1回、代表取締役及び社外取締役を交えて、意見交換を行い監査の実効性を図っております。
- ・ 会計監査人については、監査の独立性と適正性を監視しながら、四半期ごとに監査経過および結果報告を受け、意見交換等を行いました。

連結株主資本等変動計算書

(2024年4月1日から
2025年3月31日まで)

(単位：百万円)

| | 株 主 資 本 | | | | |
|---------------------------------|---------|-------|--------|---------|--------|
| | 資 本 金 | 資本剰余金 | 利益剰余金 | 自 己 株 式 | 株主資本合計 |
| 当 期 首 残 高 | 4,713 | 5,103 | 14,027 | △3,518 | 20,325 |
| 当 期 変 動 額 | | | | | |
| 剰 余 金 の 配 当 | - | - | △1,659 | - | △1,659 |
| 親会社株主に帰属する 当 期 純 利 益 | - | - | 4,603 | - | 4,603 |
| 自 己 株 式 の 取 得 | - | - | - | △2,588 | △2,588 |
| 自 己 株 式 の 処 分 | - | 1,765 | - | 1,031 | 2,797 |
| そ の 他 | - | - | 5 | - | 5 |
| 株主資本以外の項目の 当 期 変 動 額 (純 額) | - | - | - | - | - |
| 当 期 変 動 額 合 計 | - | 1,765 | 2,949 | △1,557 | 3,158 |
| 当 期 末 残 高 | 4,713 | 6,869 | 16,977 | △5,075 | 23,484 |

(単位：百万円)

| | そ の 他 の 包 括 利 益 累 計 額 | | | | 純 資 産 合 計 |
|---------------------------------|-----------------------|--------------------|----------------------|------------------------------|-----------|
| | その他有価証券 評価差額金 | 為 替 換 算 勘 定 調 整 | 退職給付に係る 調整 累 計 | そ の 他 の 包 括 利 益 累 計 額 合 計 | |
| 当 期 首 残 高 | 859 | △8 | 0 | 852 | 21,178 |
| 当 期 変 動 額 | | | | | |
| 剰 余 金 の 配 当 | - | - | - | - | △1,659 |
| 親会社株主に帰属する 当 期 純 利 益 | - | - | - | - | 4,603 |
| 自 己 株 式 の 取 得 | - | - | - | - | △2,588 |
| 自 己 株 式 の 処 分 | - | - | - | - | 2,797 |
| そ の 他 | - | - | - | - | 5 |
| 株主資本以外の項目の 当 期 変 動 額 (純 額) | △154 | 4 | △4 | △154 | △154 |
| 当 期 変 動 額 合 計 | △154 | 4 | △4 | △154 | 3,003 |
| 当 期 末 残 高 | 705 | △3 | △3 | 697 | 24,182 |

連 結 注 記 表

I. 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記

1. 連結の範囲に関する事項

- (1) 連結子会社の数 9社
主要な連結子会社の名称 J B C C株式会社
J B サービス株式会社
- (2) 非連結子会社の数
該当事項はありません。

2. 持分法の適用に関する事項

- (1) 持分法適用の非連結子会社及び関連会社
該当事項はありません。
- (2) 持分法を適用しない非連結子会社及び関連会社
該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、佳報（上海）信息技術有限公司 及び JBCC(Thailand)Co.,Ltd.の決算日は12月31日であります。連結計算書類の作成にあたっては、同日現在の計算書類を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。また、その他の連結子会社の決算日と連結決算日は一致しておりません。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

①有価証券

子会社株式及び関連会社株式 移動平均法による原価法
満期保有目的の債券 償却原価法(定額法)

その他有価証券

市場価格のない株式等以
外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

②棚卸資産

評価基準は原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)によっております。

商品、原材料

主として移動平均法

製品、仕掛品

総平均法(但し、ソフトウェア仕掛品は個別法)

貯蔵品

先入先出法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

①有形固定資産

(リース資産を除く)

(i)建物及び構築物

定率法を採用しております。耐用年数は2年から45年であります。

なお、1998年4月1日以降に取得した建物(附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

(ii)工具、器具及び備品

定率法を採用しております。耐用年数は2年から15年であります。

②無形固定資産

(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、自社利用ソフトウェアについては、社内における見込利用可能期間(5年以内)に基づく定額法、市場販売目的のソフトウェアについては、見込有効期間(3年以内)に基づく償却額と見込販売数量に基づく償却額のいずれか大きい額により償却しております。

③リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

①貸倒引当金

売上債権等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

②受注損失引当金

受注契約に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末における受注契約のうち、損失発生の可能性が高く、かつその金額を合理的に見積ることが可能な案件の損失見込額を計上しております。

③訴訟損失引当金

訴訟に対する損失に備えるため、係争中の案件に対し、事実関係や訴訟の進行状況等を考慮して、将来発生する可能性のある損失見込額を計上しております。

④インセンティブ引当金

報奨（旅行等現物を含む）の支給に備えるため、支給見込額のうち当連結会計年度に負担する金額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

数理計算上の差異等の費用処理方法

当社及び連結子会社の一部は、確定拠出年金制度を採用しており、要拠出額をもって費用処理しております。また、連結子会社の一部は、退職一時金制度を採用しており、簡便法による会計処理を行っております。なお、退職者に係る閉鎖型確定給付企業年金が当社の契約として残っており、当該制度に係る数理計算上の差異は翌期に一括償却処理をしております。

(5) 収益及び費用の計上基準

当社グループの主要な事業における主な履行義務の内容及び収益を認識する時点は以下のとおりであります。

①S Iによる収益

S Iの主要な内容は、当社グループ独自の開発手法「J Bアジャイル」を取り入れた超高速開発を中心としたシステム開発の請負契約等であります。これらは主として一定の期間にわたり充足される履行義務と判断し、履行義務の充足に係る進捗度を見積り、当該進捗度に基づき収益を一定の期間にわたり認識しております。また、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積ることができないが、発生した費用を回収することが見込まれる場合には、原価回収基準を適用しております。なお、工期がごく短いなど重要性の乏しい契約については、一定の期間にわたり収益を認識せず、完全に履行義務を充足した時点で収益を認識しております。履行義務の充足に係る進捗度の見積りの方法は、見積総原価に対する発生原価の割合で算出しております。

② サービスによる収益

サービスの主要な内容は、クラウドやセキュリティサービスを中心としたITシステムの運用・保守サービスであります。これらは顧客との契約期間にわたり履行義務が充足されるものと判断し、一定期間にわたり顧客との契約において約束された金額を収益として認識しております。

③ サービスに含まれるITシステム構築による収益

サービスに含まれるITシステム構築の主要な内容は、システム機器やインフラ基盤の設計・導入を中心としたITシステム構築の請負契約等であります。これらは主として一定の期間にわたり充足される履行義務と判断し、履行義務の充足に係る進捗度を見積り、当該進捗度に基づき収益を一定の期間にわたり認識しております。また、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積もることができないが、発生した費用を回収することが見込まれる場合には、原価回収基準を適用しております。なお、工期がごく短いなど重要性の乏しい契約については、一定の期間にわたり収益を認識せず、完全に履行義務を充足した時点で収益を認識しております。履行義務の充足に係る進捗度の見積りの方法は、見積総原価に対する発生原価の割合で算出しております。

④ システム、製品開発製造販売による収益

システムの主要な内容は、ハードウェア及びソフトウェアの販売であります。また、製品開発製造の主要な内容は、クラウド連携プラットフォーム等、独自のソフトウェアや生産管理システムの開発・提供及びプリンター等各種ハードウェアの製造・販売であります。

これらのうち、顧客との契約の中で当社グループが据付の義務を負う製品は顧客の検収を受けた時点において、顧客との契約の中で当社グループが据付の義務を負わない製品は引き渡した時点において、顧客に支配が移転すると判断し、収益を認識しております。

これらの履行義務に対する対価は、履行義務充足後、支払条件により一年以内に取り引対価を受領しているため、重大な金融要素を含んでおりません。

(6) その他連結計算書類作成のための基本となる重要な事項

グループ通算制度の適用 当社及び国内連結子会社は、グループ通算制度を適用しております。

5. 重要な会計上の見積りに関する注記

(システム開発の請負契約等における原価総額の見積り)

(1) 当連結会計年度の連結計算書類に計上した金額

履行義務の充足に係る進捗度に基づき一定の期間にわたり認識したシステム開発の請負契約等に係る収益のうち、当連結会計年度末時点で進行中のものに係る売上高は4,234百万円（うち、当連結会計年度に認識した金額3,430百万円、過年度に認識済み

の金額803百万円)であります。

当連結会計年度末に計上した受注損失引当金は1百万円であります。

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

①金額の算出方法、重要な会計上の見積りに用いた主要な仮定

システム開発の請負契約等については、主として履行義務の充足に係る進捗度を見積り、当該進捗度に基づき収益を一定の期間にわたり認識しております。当該進捗度は、各報告期間の期末日までに発生した原価の累計額が見積原価総額に占める割合に基づき見積もっております。

また、システム開発の請負契約等について、原価総額が収益総額を超過する可能性が高く、かつ、その金額を合理的に見積ることができる場合には、その超過すると見込まれる額のうち、当該請負契約等に関して既に計上された損益の額を控除した残額を、受注損失が見込まれた期の損失として処理し、受注損失引当金を計上しております。

そのため、当社グループは、システム開発の請負契約等に係る収益の認識及び受注損失引当金の会計処理にあたり、各請負契約等に係る原価総額の見積りを行っております。

なお、システム開発の請負契約等においては、顧客の要望の高度化・複雑化や開発着手後のシステム要件の変更等により、当初の原価総額の見積りより作業工数等が増加し、追加費用が発生する場合には、原価総額の見直しを行っております。

②重要な会計上の見積りが翌連結会計年度の連結計算書類に与える影響

当連結会計年度の原価総額の見積りは適切であると評価しておりますが、追加工数の発生等により当初の見積りに変更が生じ総原価が変動する場合には、連結計算書類上で認識する進捗度に応じた収益の金額及び受注損失引当金の金額に重要な影響を与える可能性があります。

II. 連結貸借対照表に関する注記

1. 有形固定資産の減価償却累計額 2,578百万円
2. 取引銀行と当座貸越契約及び貸出コミットメントライン契約を締結しております。
これらの契約に基づく当連結会計年度末の借入未実行残高は次の通りであります。
当座貸越極度額及び貸出コミットメントの総額 13,100百万円
借入実行残高 -百万円
借入未実行残高 13,100百万円

III. 連結株主資本等変動計算書に関する注記

1. 当連結会計年度末の発行済株式の種類及び総数
普通株式 17,773,743株
2. 当連結会計年度末の自己株式の種類及び総数
普通株式 2,238,247株

- (注) 1. 当事業年度末の自己株式数には、「J B C Cグループ社員持株会専用信託」が保有する自社の株式599,400株が含まれております。
2. 2025年4月1日付で普通株式1株につき4株の割合で株式分割を行っておりますが、上記の事項は、当該株式分割前の株式数を基準としております。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

| 決 議 | 株式の種 類 | 配当金の総 額 (百万円) | 1株当たり配 当 額 (円) | 基 準 日 | 効力発生日 |
|---------------------|--------|------------------|-------------------|------------|------------|
| 2024年5月21日 取締役会 | 普通株式 | 836 | 54.00 | 2024年3月31日 | 2024年6月19日 |
| 2024年10月31日 取締役会 | 普通株式 | 823 | 53.00 | 2024年9月30日 | 2024年12月2日 |

- (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

| 決 議 | 株式の種 類 | 配当の原 資 | 配当金の総 額 (百万円) | 1株当たり配 当 額 (円) | 基 準 日 | 効力発生日 |
|--------------------|--------|--------|------------------|-------------------|----------------|----------------|
| 2025年5月20日 取締役会 | 普通株式 | 利益剰余金 | 1,306 | 81.00 | 2025年 3月31日 | 2025年 6月18日 |

- (注) 2025年4月1日付で普通株式1株につき4株の割合で株式分割を行っておりますが、1株当たり配当額は、当該株式分割前の金額を記載しております。

IV. 金融商品に関する注記

1. 金融商品の状況に関する事項

当社グループは、必要に応じ、銀行借入等により資金を調達しております。資金運用

については、預金その他の安全性の高い金融商品に限定して運用を行います。デリバティブはリスクヘッジ目的に限って利用する可能性があります。投機的な取引は行わない方針です。

受取手形及び売掛金は、お客様の信用リスクに晒されておりますが、社内規程に従い、与信管理及び売掛金回収管理を行っております。お客様ごとに回収遅滞管理及び与信残高管理を行うとともに、信用状況の定期的なモニタリングを行い、年2回の頻度で与信限度額の定期的見直しを行っております。

また、投資有価証券は主として株式であり、その大半が当社グループの業務上関係を有する取引先企業の株式です。これらは、市場価格の変動リスクや発行体の信用リスクに晒されておりますが、定期的に時価や発行体の財務状況等を把握するようにしております。

営業債務である支払手形及び買掛金は概ね短期の支払期日であります。

営業債務については、各社ごとに資金繰り見通しを作成し、当社においてグループ内の事業会社各社の資金ニーズを把握し、グループファイナンスにより事業会社間で資金の融通を行うことにより、資金を効率的に使用しております。

長期借入金については、「E-Ship信託」の導入に伴う信託口における金融機関からの借入金が含まれております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

2025年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次の通りであります。なお、市場価格のない株式等（連結貸借対照表計上額96百万円）は「その他有価証券」には含めておりません。

(単位：百万円)

| | 連結貸借対照表 計上額 | 時価 | 差額 |
|-------------------------------|----------------|-------|-----|
| (1) 投資有価証券 | | | |
| 満期保有目的の債券 | 500 | 485 | △14 |
| その他有価証券 | 1,630 | 1,630 | - |
| | 2,130 | 2,115 | △14 |
| (2) リース債務 (1年以内返済予定のものも含む) | 100 | 100 | 0 |
| (3) 長期借入金 | 2,588 | 2,588 | 0 |

(注) 1. 「現金及び預金」、「受取手形」、「売掛金」、「支払手形及び買掛金」、「未払金」、及び「未払法人税等」については、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

2. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価： 観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価： 観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価： 観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価をもって連結貸借対照表に計上している金融商品

(単位：百万円)

| 区 分 | 時価 | | | |
|--------|-------|------|------|-------|
| | レベル1 | レベル2 | レベル3 | 合計 |
| 投資有価証券 | | | | |
| 其他有価証券 | 1,630 | - | - | 1,630 |
| 資産計 | 1,630 | - | - | 1,630 |

(注)時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1に分類しています。

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

(単位：百万円)

| 区 分 | 時価 | | | |
|-----------------------|------|-------|------|-------|
| | レベル1 | レベル2 | レベル3 | 合計 |
| 投資有価証券 | | | | |
| 満期保有目的債券 | - | - | 485 | 485 |
| 資産計 | - | - | 485 | 485 |
| リース債務（一年以内返済予定のものも含む） | - | 100 | - | 100 |
| 長期借入金（一年以内返済予定のものも含む） | | 2,588 | | 2,588 |
| 負債計 | - | 2,688 | - | 2,688 |

(注)時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

債券の時価は取引金融機関から提示された価格に基づいて算出しており、モンテカルロシミュレーション等を用いて債券の将来クーポンを推計し、発行体クレジット及びスワップ金利で現在価値に引き直して債券価値を算出しております。なお、算定にあたり一部市場で観察不能なインプットを使用しているため、レベル3に分類しております。

リース債務（一年以内返済予定のものも含む）

これらの時価については、元利金の合計額を、新規に同様の借入又はリース取引を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しており、レベル2に分類しております。

長期借入金（1年内返済予定のものも含む）

長期借入金の時価は、元利金の合計額と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。また、「E-Ship信託」の導入に伴う信託口における金融機関からの借入金は、短期間で市場金利を反映するため、時価は帳簿価額に近似しているものであることから、当該帳簿価額によっております。

V. 収益認識に関する注記

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

当社グループは、情報ソリューション事業及び製品開発製造事業を営んでおり、各事業の主な財又はサービスの種類は、SI、サービス、システム及び製品開発製造であります。また、主な財又はサービスの売上高は、SI 17,086百万円、サービス 38,647百万円、システム 12,161百万円及び製品開発製造 1,972百万円であります。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記 4. 会計方針に関する事項 (5) 収益及び費用の計上基準」に記載の通りであります。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 契約資産及び契約負債の残高等

(単位：百万円)

| | 期首残高 | 期末残高 |
|---------------|-------|-------|
| 顧客との契約から生じた債権 | | |
| 受取手形 | 370 | 373 |
| 売掛金 | 8,370 | 9,302 |
| 契約資産 | 4,566 | 4,340 |
| 契約負債 | 2,552 | 3,486 |

(注)当連結会計年度に認識された収益の額のうち、期首現在の契約負債残高に含まれていた額は、2,174百万円であります。また、過去の期間に充足（又は部分的に充足）した履行義務から、当連結会計年度に認識した収益に重要性はありません。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当連結会計年度末時点で未充足の履行義務に配分した取引価格の総額及び収益の認識が見込まれる期間は以下の通りであります。

(単位：百万円)

| 期間 | 金額 |
|------|--------|
| 一年以内 | 14,130 |
| 一年超 | 184 |
| 合計 | 14,315 |

VI. 1株当たり情報に関する注記

- | | |
|---------------|---------|
| 1. 1株当たり純資産額 | 389円14銭 |
| 2. 1株当たり当期純利益 | 74円19銭 |

- (注) 1. 「信託型従業員持株インセンティブ・プラン (E-Ship)」により「J B C Cグループ社員持株会専用信託」が保有する当社株式を、1株当たり純資産額の算定上、期末発行済株式総数から控除する自己株式数に含めております (当連結会計年度末2,397,600株)。また1株当たり当期純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式数に含めております (当連結会計年度119,078株)。
2. 2025年4月1日付で普通株式1株につき4株の割合で株式分割を行っております。したがって、当連結会計年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、「期末発行済株式数」、「期末自己株式数」及び「期中平均株式数」を算定しております。

VII. 重要な後発事象に関する注記

当社は、2025年1月30日開催の取締役会の決議に基づき、2025年4月1日付で株式分割を行っております。

1. 株式分割

(1) 株式分割の目的

当社普通株式の投資単位当たりの金額を引き下げ、より多くの投資家の皆さまが投資しやすい環境を整えることで、投資家層の拡大と株式の流動性の向上を図ることを目的としております。

(2) 株式分割の概要

①分割の方法

2025年3月31日 (月曜日) 最終の株主名簿に記載又は記録された株主の所有普通株式1株につき、4株の割合をもって分割しております。

②分割により増加する株式数

| | |
|--------------------|--------------|
| I 株式分割前の発行済株式総数 | 17,773,743株 |
| II 今回の分割により増加する株式数 | 53,321,229株 |
| III 株式分割後の発行済株式総数 | 71,094,972株 |
| IV 株式分割後の発行可能株式総数 | 284,000,000株 |

(注) 上記 I ~ III は、2024年9月30日現在の発行済株式総数に基づき記載しております。

(3) 日程

| | |
|-----------|-----------------|
| I 基準日公告日 | 2025年3月14日(金曜日) |
| II 基準日 | 2025年3月31日(月曜日) |
| III 効力発生日 | 2025年4月1日(火曜日) |

(4) その他

① 資本金の額の変更

今回の株式分割に際して、資本金の額の変更はありません。

② 1株当たり情報に及ぼす影響

株式分割による影響は、「VI.1 株当たり情報に関する注記」に記載しております。

2. 定款の一部変更

(1) 定款変更の理由

今回の株式分割に伴い、会社法第184条第2項の規定に基づき、2025年4月1日(火曜日)をもって、当社定款第6条で定める発行可能株式総数を以下のとおり変更しております。

(2) 定款変更の内容

(下線部分は変更箇所を示しております)

| 現行定款 | 変更後定款 |
|---|--|
| (発行可能株式総数) 第6条 当社の発行可能株式総数は 8,600万株とする。 | (発行可能株式総数) 第6条 当社の発行可能株式総数は 28,400万株とする。 |

(3) 日程

| | |
|-----------|-----------------|
| I 取締役会決議日 | 2025年1月30日(木曜日) |
| II 効力発生日 | 2025年4月1日(火曜日) |

VIII. その他の注記

追加情報

株式付与E-Ship信託

当社は、2025年1月30日開催の取締役会において、人的資本経営の一環として、また、当社及び当社の子会社の社員に対する当社の中長期的な企業価値向上のインセンティブの付与と、福利厚生拡充、並びに株主としての資本参加による社員の勤労意欲向上を通じた当社の恒常的な発展を促すことを目的として、「信託型従業員持株インセンティブ・プラン (E-Ship) 」(以下、「本プラン」といいます。)を導入しております。

① 本プランの概要

本プランは、「J B C Cグループ社員持株会」(以下、「持株会」といいます。)に加入するすべての社員を対象とするインセンティブ・プランです。本プランでは、当社が信託銀行に「J B C Cグループ社員持株会専用信託」(以下、「E-Ship 信託」といいます。)を設定し、E-Ship信託は、今後5年間にわたり持株会が取得すると見込まれる規模の当社株式を、取引先金融機関からの借入金を原資として当社からの第三者割当によって予め取得します。その後は、E-Ship信託から持株会に対して継続的に当社株式の売却が行われるとともに、信託終了時点で E-Ship信託内に株式売却益相当額が累積した場合には、当該株式売却益相当額が残余財産として受益者適格要件を満たす者に分配されます。なお、当社は、E-Ship信託が当社株式を取得するための借入に対し保証をしているため、当社株価の下落により E-Ship 信託内に株式売却損相当額が累積し、信託終了時点において E-Ship信託内に当該株式売却損相当の借入金残債がある場合は、当社が当該残債を弁済することになります。

② 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により、純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、当連結会計年度末において2,562百万円、599,400株であります。

当社は、2025年4月1日付で普通株式1株につき4株の割合で株式分割を行っておりますが、上記株式数については、当該株式分割前の株式数を記載しております。

*本連結計算書類中の記載金額は、表示単位未満の端数を切り捨てて表示しております。

株主資本等変動計算書

(2024年4月1日から
2025年3月31日まで)

(単位：百万円)

| | 株 主 資 本 | | | | | |
|-------------------------|---------|-----------|----------------|-----------|--------------|-------------|
| | 資 本 金 | 資 本 剰 余 金 | | 利 益 剰 余 金 | | |
| | | 資本準備金 | その他資本 剰 余 金 | 利益準備金 | その他 利益剰余金 | |
| | | | | | 研究開発 積立金 | 繰越利益 剰余金 |
| 当 期 首 残 高 | 4,713 | 4,786 | 238 | 208 | 180 | 8,072 |
| 当 期 変 動 額 | | | | | | |
| 剰 余 金 の 配 当 | - | - | - | - | - | △1,659 |
| 当 期 純 利 益 | - | - | - | - | - | 4,987 |
| 自己株式の取得 | - | - | - | - | - | - |
| 自己株式の処分 | - | - | 1,765 | - | - | - |
| 株主資本以外の項目の 当期変動額（純額） | - | - | - | - | - | - |
| 当 期 変 動 額 合 計 | - | - | 1,765 | - | - | 3,327 |
| 当 期 末 残 高 | 4,713 | 4,786 | 2,003 | 208 | 180 | 11,399 |

(単位：百万円)

| | 株 主 資 本 | | 評価・換算差額等 | 純 資 産 合 計 |
|-------------------------|---------|-------------|------------------|-----------|
| | 自 己 株 式 | 株 主 資 本 合 計 | その他有価証券 評価差額金 | |
| 当 期 首 残 高 | △3,518 | 14,680 | 830 | 15,510 |
| 当 期 変 動 額 | | | | |
| 剰 余 金 の 配 当 | - | △1,659 | - | △1,659 |
| 当 期 純 利 益 | - | 4,987 | - | 4,987 |
| 自己株式の取得 | △2,588 | △2,588 | - | △2,588 |
| 自己株式の処分 | 1,031 | 2,797 | - | 2,797 |
| 株主資本以外の項目の 当期変動額（純額） | - | - | △130 | △130 |
| 当 期 変 動 額 合 計 | △1,557 | 3,536 | △130 | 3,405 |
| 当 期 末 残 高 | △5,075 | 18,216 | 700 | 18,916 |

個別注記表

I. 重要な会計方針に係る事項に関する注記

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式 移動平均法による原価法

(2) 満期保有目的の債券 償却原価法(定額法)

(3) その他有価証券

①市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

②市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産
(リース資産を除く)

定率法を採用しております。なお、耐用年数は2年から45年であります。

但し、1998年4月1日以降に取得した建物（附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法を採用しております。

(2) 無形固定資産
(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、自社利用ソフトウェアについては、社内における見込利用可能期間（5年以内）に基づく定額法、市場販売目的ソフトウェアについては、見込有効期間（3年以内）に基づく償却額と見込販売数量に基づく償却額のいずれか大きい額により償却しております。

(3) リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) インセンティブ引当金

報奨（旅行等現物を含む）の支給に備えるため、支給見込額のうち当事業年度に負担する金額を計上しております。

4. 退職給付に係る会計処理の方法
数理計算上の差異等の費用処理方法

当社は、確定拠出年金制度を採用しており、要拠出額をもって費用処理しております。

また、退職者に係る閉鎖型確定給付企業年金が当社の契約として残っており、当該制度に係る数理計算上の差異は翌期に一括償却処理をしております。

5. 収益及び費用の計上基準

純粹持株会社の当社の収益は、子会社からの経営指導料及び受取配当金となります。経営指導料においては、子会社への契約内容に応じた受託業務を提供することが履行義務であり、業務が実際された時点で当社の履行義務が充足されることから、当該時点で収益及び費用を認識しております。受取配当金については、配当金の効力発生日をもって認識しております。

6. その他計算書類作成のための基本となる重要な事項

グループ通算制度の適用

当社は、グループ通算制度を適用しております。

II. 貸借対照表に関する注記

| | |
|--|------------------|
| 1. 有形固定資産の減価償却累計額 | 1,264百万円 |
| 2. 関係会社に対する金銭債権 | |
| 短期金銭債権 | 541百万円 |
| 長期金銭債権 | 312百万円 |
| 3. 関係会社に対する金銭債務 | |
| 短期金銭債務 | 7,835百万円 |
| 4. 取引銀行と当座貸越契約及び貸出コミットメントライン契約を締結しております。 これらの契約に基づく当事業年度の借入未実行残高は次の通りであります。 | |
| 当座貸越極度額及び貸出コミットメントの総額 | 12,000百万円 |
| 借入実行残高 | - |
| 借入未実行残高 | <u>12,000百万円</u> |

III. 損益計算書に関する注記

| | |
|--------------------|----------|
| 関係会社との取引高の総額 | |
| 営業取引による取引高の総額 | |
| 営業収益 | 6,248百万円 |
| 営業費用 | 450百万円 |
| 営業取引以外の取引による取引高の総額 | 25百万円 |

IV. 株主資本等変動計算書に関する注記

自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：株)

| 株式の種類 | 当事業年度期首株数 | 当事業年度増加株式数 | 当事業年度減少株式数 | 当事業年度末株数 |
|-------|-----------|------------|------------|-----------|
| 普通株式 | 2,286,168 | 8,979 | 56,900 | 2,238,247 |

- (注) 1. 自己株式の数の増加は、譲渡制限付株式の無償取得8,718株及び単元未満株式の買取り261株によるものであります。
2. 自己株式の数の減少は、「J B C Cグループ社員持株会専用信託」から社員持株会への売却5,900株及び、譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分51,000株によるものであります。
3. 当事業年度末の自己株式数には、「J B C Cグループ社員持株会専用信託」が保有する自社の株式599,400株が含まれております。
4. 2025年4月1日付で普通株式1株につき4株の割合で株式分割を行っておりますが、上記の事項は、当該株式分割前の株式数を基準としております。

V. 税効果会計に関する注記

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(繰延税金資産)

| | |
|-----------------------|-----------------|
| 会社分割による子会社株式 | 1,854百万円 |
| 貸倒引当金 | 98百万円 |
| 投資有価証券 | 49百万円 |
| 資産除去債務 | 249百万円 |
| 会員権 | 18百万円 |
| 子会社株式 | 40百万円 |
| その他 | 82百万円 |
| 繰延税金資産小計 | <u>2,393百万円</u> |
| 将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額 | <u>△456百万円</u> |
| 評価性引当額小計 | <u>△456百万円</u> |
| 繰延税金資産合計 | <u>1,936百万円</u> |

(繰延税金負債)

| | |
|------------------|-----------------|
| 有形固定資産 | △168百万円 |
| その他有価証券評価差額金(益) | △267百万円 |
| 前払年金費用 | △11百万円 |
| 繰延税金負債合計 | <u>△446百万円</u> |
| 差引：繰延税金資産(負債)の純額 | <u>1,490百万円</u> |

VI. 関連当事者との取引に関する注記

1. 子会社等

(単位：百万円)

| 種類 | 会社等の名称 | 議決権等の 所有割合(%) | 関連当事者 との関係 | 取引の内容 | 取引 金額 | 科 目 | 期末 残高 |
|-----|-------------------------|------------------|-------------------------------------|------------------|----------|------------------------|-------------|
| 子会社 | JBCC株式会社 | (所有) 直接 100 | 経営指導 事務所等の賃貸 資金の貸借取引 役員の兼務 | 経営指導料・事務手数料(注) 1 | 1,252 | 未収入金 | 324 |
| | | | | 受取配当金(注) 3 | 3,040 | - | - |
| | | | | 資金の貸借取引(注) 2 | 463 | 預り金 | 4,808 |
| | | | | 支払利息及び割引料 | 14 | - | - |
| | 株式会社シーアイエス | (所有) 直接 100 | 経営指導 資金の貸借取引 事務所等の賃貸 役員の兼務 | 資金の貸借取引(注) 2 | 110 | 預り金 | 805 |
| | JBサービス株式会社 | (所有) 直接 100 | 経営指導 事務所等の賃貸 資金の貸借取引 役員の兼務 | 受取配当金(注) 3 | 916 | - | - |
| | | | | 資金の貸借取引(注) 2 | 286 | 預り金 | 1,709 |
| | C&Cビジネスサービス株式会社 | (所有) 直接 100 | 事務所等の賃貸 業務委託 資金の貸借取引 役員の兼務 | 業務委託料(注) 1 | 296 | 未払金 | 55 |
| | JBCC(Thailand) Co.,Ltd. | (所有) 直接 49.0 | 資金の貸借取引 | 資金の貸借取引(注) 2 | - | 関係会社長期 貸付金 貸倒引当金 | 312 △312 |

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

1. 経営指導料・事務手数料、業務委託料については、年度協議により決定しております。
2. 資金の貸借取引は当社グループで行っているグループファイナンスに係るものであり、利率は市場金利を勘案して合理的に決定しております。
3. 受取配当額については、財務状況を勘案して配当額を決定しております。

2. 役員及び個人主要株主等

(単位：百万円)

| 種類 | 会社等の名称 又は氏名 | 事業の内容 又は職業 | 議 決 権 等 の 所 有 割 合 (%) | 関 連 当 事 者 と の 関 係 | 取 引 の 内 容 | 取 引 金 額 | 科 目 | 期 末 残 高 |
|----|----------------|-------------------|----------------------------|----------------------|----------------|---------|-----|---------|
| 役員 | 東上征司 | 当社 代表取締役 社長 | (被所有) 直接 0.7 | - | 自己株式の処分 (注) | 19 | - | - |

(注) 譲渡制限付株式報酬制度に伴う、自己株式割当によるものであります。

VII. 収益認識に関する注記

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「I.重要な会計方針に係る事項に関する注記 5 収益及び費用の計上基準」に記載の通りであります。

VIII. 1株当たり情報に関する注記

- 1株当たり純資産額 304円41銭
- 1株当たり当期純利益 80円36銭

(注) 1. 「信託型従業員持株インセンティブ・プラン (E-Ship)」により「J B C Cグループ社員持株会専用信託」が保有する当社株式を、1株当たり純資産額の算定上、期末発行済株式総数から控除する自己株式数に含めております (当事業年度末2,397,600株)。また1株当たり当期純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式数に含めております (当事業年度119,078株)。
2. 2025年4月1日付で普通株式1株につき4株の割合で株式分割を行っております。したがって、当事業年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、「期末発行済株式数」、「期末自己株式数」及び「期中平均株式数」を算定しております。

IX. 重要な後発事象に関する注記

株式分割

連結計算書類「連結注記表 重要な後発事象に関する注記 株式分割」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

X. その他の注記

株式付与E-Ship信託

連結計算書類「連結注記表 その他の注記 追加情報 株式付与E-Ship信託」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

* 本計算書類中の記載金額は、表示単位未満の端数を切り捨てて表示しております。